

ら は た

TAHARA History Inquiry Club

探訪

歴史

クラブ

其の36

地域の文化を彩った画人たち

かつて絵画は、描くことも鑑賞することも今以上に盛んで、ことに鑑賞するとはいわば娯楽のひとつであり、趣味人が家に集っては絵に対するうんちくを披露する、といったことが頻繁に行われていたようです。昭和30年代までは実におおらかに文化を楽しんでいた時代です。かつて市内に何軒かの骨董屋があったことを覚えている方もいると思います。これは古書画を含めた絵画作品が、今以上に身近だったことを示しています。

ご存じのとおり田原市は、幕末の南画家渡辺華山ゆかりの地です。また、その子小華の影響と南画の隆盛とともに、明治時代から大正時代にかけて田原の画壇は大いに盛り上がっていたようです。

平成9年、赤羽根文化会館で開かれた「赤羽根町ゆかりの作家展」には、小笠原華文、石川華香など名の知られた画家のほか、ほとんど名の知られていない太田美山、長谷川栄玉の作品までも展示されました。また平成14年には、田原市博物館で野田町の渡辺杜月の展覧会が開催されました。ともに華山、小華の陰に隠れてこれまで注目されなかった地域



小笠原華文筆 花鳥図

の画家たちを再評価する機会となったものです。今後は、画家に限らず近代の文化活動の記録を行い、それらを評価し地域の個性を明らかにする必要を感じます。

さて、今回は小笠原華文について紹介します。

小笠原華文（庸雄・1876～1924）は赤羽根町の光明

寺に生まれました。父暉山（景養）は小華に画を学び、華文もその影響で画家を志しました。横浜で画を学び帰郷したのち鍋木華国に学びました。そして名古屋の南画家三浦石齋、織田杏齋に学び本格的な画家となりました。花鳥画を得意とした荒木十畝にも学び、帝国絵画京進会、中央南宗画会に出品し読画会の幹事となつていきます。その作品は生家の光明寺をはじめ、市内にもその作品を愛蔵している方が多くいます。華文の作品はジャンルの幅が広く、本格的な花鳥画から山水画、おめでたい画題、そして寺院の襖絵などが残されており、伝統的な画題と技法に近代的な装飾性を加えた華やかな作品に持ち味があります。とかく器用な人気作家は乱作に走りがちですが、華文の場合どの作品も手を抜く



小笠原華文絵付けの湯呑み

ことなく描かれています。華文は大正時代に活躍し、当時東三河出身の画家として一番活躍したと言えます。小華の次を担う画家として期待されていましたが、残念ながら46歳でという若さで急逝しました。華文は、小華につぐ田原市が誇る日本画家と言えます。

写真は、市内の旧家で所蔵していたものです。色紙大のアルバムに鳥、花などが色鮮やかに描かれています。また、石が描かれた湯呑みは注文主の好みによって依頼されたのでしよう。画家と美術愛好家との距離が近かったほほえましい時代を感じさせます。（増山）

【南画】山水画、花鳥画などに代表される江戸時代に中国からもたらされた絵画のジャンル。

生涯学習課 ☎ 23局3531